

「認知症 Precision Medicine : 予防新時代へ」



日本認知症予防学会 理事
京都大学 iPS 細胞研究所 教授
井上治久

2015 年米国一般教書演説において、当時のオバマ米国大統領が発表された Precision Medicine は、適切な医療を、適切なタイミングで、適切な方にお届けすること、と定義できます。個々の方々の違いを遺伝子レベルで理解しながら、個別に最適な医療を提供し、さらには病気の予防法の確立を目指すものです。

認知症を生じる疾患として 50%以上を占めるのはアルツハイマー病です。これまでの 30 年間で、アルツハイマー病の研究は、大きく進展してきました。患者さんの死後神経病理の解析、家族性アルツハイマー病原因遺伝子の発見とそれに続く機能解析、アミロイドβ仮説の誕生、病気のモデルの作製へと進みました。

アルツハイマー病の時間的段階の上流では、脳内でアミロイド前駆体タンパクから、アミロイドβが切り出されて、いくつかの過程を経て、神経細胞を障害すると考えられてきました。このアミロイドβ仮説に基づき、認知機能障害の進行を抑制する疾患修飾療法 (disease-modifying therapy: DMT) として、抗アミロイドβ抗体の臨床試験が実施され、これらを含め、いよいよアルツハイマー病の DMT 登場が現実味を帯びて参りました。

我が国の認知症高齢者数は 2012 年に 462 万人、2050 年には 1,000 万人を超えると推計されています。2019 年に取りまとめられた「認知症施策推進大綱」(厚生労働省) の 5 つの具体的な施策の一つは、認知症になるのを遅らせる、進行を緩やかにする「予防」ですが、今後の DMT の登場は、認知症予防の新時代の到来でもあります。ますます、真の Precision Medicine、個々の方々の違いを、病態 x タイミング x 遺伝子に基づき理解し、そこからの診断・予防が重要になると考えられます。

日本認知症予防学会 基礎研究推進委員会では、今後とも、本学会が推進する認知症予防の一助となる活動を継続させていただければと存じます。